

題目 良い討議とは何か：討議の質評価指標の開発と多元的共通善に関する集団討議実験

氏名 相馬ゆめ

指導教員 大沼進

本研究は討議の質を可視化する指標を開発し、最不遇者の立場についての情報が共通善に及ぼす効果を検討するために集団討議実験を行った。公共的討議においては、参加者は社会全体にとっての望ましさ、つまり共通善について議論することが求められる。共通善は功利主義、平等原理、マキシミン原理など、複数の価値の系から成り立っている。共通善について、一方の価値の系からのみの議論は、他の価値観を捨象することに繋がる。特に社会の最不遇者の立場を最大化する選択肢を選ぶべきというマキシミン原理からの議論は、彼らが社会の中の少数であるため、人々が想起しにくい。多元的な共通善について満遍なく議論される要件を実証するために二つの研究を行った。研究1では、共通善への言及などの討議の質を、議論に参加していない第三者が総合的に評定する既存の指標 (Discourse Quality Index: DQI; Steenbergen et al., 2003) を修正し、開発した。集団討議実験は、現在福島県双葉町・大熊町で管理・貯蔵されている低濃度除去土壌をテーマとして、原則4人一組で行った。研究1の結果、DQI 評定は異なる評定者間で十分に一致していた。また評定結果と議論内容に対応が見られ、開発した指標の妥当性が確認された。研究2では、研究1の議論で共通善のうちマキシミン原理の観点からの議論が少なかったことを受け、その点に着目し条件操作を行った。具体的には、実験条件では福島の人々の状況や想いを知らせる情報を議論前に提示し、統制条件では提示しなかった。情報提示により、参加者が福島の人々を配慮するようになり、彼らを慮る発言や、共通善の評価に対するマキシミン原理の関連の強さが増加すると予測した。研究2の結果、グループの結論は実験条件の方が福島の人々に配慮したものが多く、参加者の自己評価からも、実験条件の方が彼らを配慮する発言をし、平等原理やマキシミン原理を重視したことが示唆された。しかし、DQI 評定は参加者の自己評価と逆の結果を示す部分もあった。また、両条件で共通善の評価に対するマキシミン原理の関連は弱かった。さらに、実験条件の方がマキシミン原理と平等原理、手続き的公正との連関が強く、議論前に与えられた情報が、実験条件の参加者が福島の人々の状況を理解するように促したと言える。二つの研究を通じ、多元的な共通善の評価を含め、討議の質を可視化する指標を開発し、良い討議を行うための論点や議論枠組みのあり方の一端を示した。